
親父の顔

野火俊弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親父の顔

【Nコード】

N6187E

【作者名】

野火俊弥

【あらすじ】

親父に似たいと思わないが、親父に似ている腹違いの兄に固執するのはやはり親父の顔や存在しかない。親の愛を理解出来ない淋しさの虚しさの話。

工業地帯

錆びた風と油の匂い

陰惨な土地で育った

あの男

柔らかな臭い

オデン屋の親父

そんな土地で育った

あの男

オトウサンに似てきたなあ

母がそんな事を云うもんだからバックミラーに写る自分の目元をチラと見ると、そこには豪華な着物を着た母が居て笑っている顔は俺だった。果たして俺の中に父は居るのだろうかと思う。

オトンは極道モンで良い男だった。ここで云う良いと云うのは鼻筋の通ったイケ好かない顔や古い男の気概、極道としてのあつけらかんとした考え方なんかを総合しての話だ。俺は大嫌いだった。

そのオトコマエは死してなお俺の生活を潤している。地位、名誉、財産なんかで。しかし、そのオトンは俺にとって必ずしも良い父と云う訳ではなかった。

極道モンには成るなや、オトンは言い続けあえて俺を薄汚い世界から遠いところに置こうとしたが俺も頭が悪い方じゃなかったから極道の甘い蜜を理解するのも早かった、薄汚い金のカラクリを知る機会は幾らでもあったからだ。生まれた家がそんなだから怖いものなんかも無く背が伸びるにつれて必然的に悪の道は開けてきたが、オトンは良い顔をしなかった。

ある日、塗装屋からシンナー缶をぎって小分けにして商売していたのをオトンに見つかりブン殴られた。金稼いで何が悪いんじゃない

と言ったら鼻血が出るほど殴られた。

チンピラが小遣い稼いで息巻くな

そう言つて俺と云う存在はオトンの中でチンピラになった。

俺はオトンが大嫌いだった。今でも好きになれるとは到底思えない。死ぬ前まで、古い古い組のシキタリだの何だのを振りかざす厳格なオトンの顔が俺にも有るのかと思う。

「オトンには、なれんよ」

ポツと呟いた言葉は、窓の外から吹き付ける風に掻き消され母の耳には届かなかつたらしく家を出る時から厚く塗られたファンデを、また更に厚塗りしはじめた。

運転席の太郎が「長峰さん次の信号は右でエエんですか」と言つた瞬間、ヘルメットを被つた中学生が道に飛び出してきた、遠慮の無いクラクションが鳴り響く。中学生は黒塗りのベンツが視野に飛び込んだできた事に驚いたか、ハンドルを訳の分からん方向に無理くり捻曲げて道を渡り切つた所で横滑りに大転倒した。

太郎は車を路肩に停め、運転席から出ていき倒れている少年に「ワレ死にたいんか」などとヤカリ散らかし挙げ句の果てに生徒手帳を出せと脅しているのを後ろ耳に聞いて、中学生相手にそれは無いだろうと笑いが込み上げてきたがあえて無表情に車を降りた。赤い二キビでブツブツな顔を涙と鼻水でグシャグシャにして「ごめんなさい」と何度も呟く少年の胸倉を掴んで「ごめんで済んだら警察いらんのじゃ」と沢山の吹き出物で装飾された額に青筋を浮かべ怒鳴る太郎のそばに寄ると少年が小便チビツたのか、焼けたアスファルトから立ち上るアンモニアの匂いが鼻を突いた。半袖から伸びた腕には擦り傷から流れた血が赤い筋を引いていた。

「太郎、そこ辺にしとけ。可哀相にチビツとるやん」

「こいつ、飛び出してきたんですよ」

「ぶつかつてもないし、エエやないの」

太郎が手を引いて立ち上がった後で、腰を曲げて少年にハンカチを差し出すと顔色を伺うような上目で俺を見た。

「血い出てんで」

ハンカチを受け取る切り口が不揃いで垢の詰まった爪を見て若干の嫌悪感を抱いた。「行くで」太郎に車に戻るよう促す。

あの男も、爪を噛む癖があった。

何かにつけて、俺の頭の中にまわり付くあの男は何時だって極楽とんぼの風体で何も考えていないロクデモナイ奴だ。

あの男の顔に、親父が居る。

落ち窪んだ眼窩の深い影に潜むあざとさや、軽薄に見える歯を出し笑うその口元、なканずく体に染み付く安酒の臭いが俺の嫌悪をそそり顔を見るたびに変に苛々してしまう。

親父は、俺に期待したか。

期待をしたのはあのロクデナシだ。

車に戻ると、母は未だにファンデをせっせと肌に塗り込めていた。

「花、買うん忘れとったわ。歩いて行くきん先に行つといてくれんか」

俺の顔、高慢な女の顔がゆっくりと俺に向き直り

「お寺さんの道分かるの？」

「分からなんだらタクシー拾うけんエエ」

「ほたら、先に拝んで来うわいね」

そう云う母を送り、親父の命日なんかには手向けを忘れる女の腹から生まれた俺を恥ずかしいと思うと共に親父は多分その程度だと嘲笑混じりに焼けたアスファルトに唾を吐き、未だ腰を抜かしている中学生に花屋は何処だと聞いたが、知らなかったたので寺の前に花屋くらい有るだろうかとブラブラ歩く事を決めた。

墓の前に着くと、青々としたシキビが丁寧に生けられており、そうでは無いかもしいないが、あの男、板東が来たのかと俺はまた苛つき、先に生けられた分を地面に捨て買ってきた菊の花を生け、線香を立てた。立ち上る香は、何とも安っぽい匂いで俺は情けなくなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6187e/>

親父の顔

2010年10月12日04時35分発行